

《調査》

大学生の生活意識

—— 「学歴社会と青年の生き方」調査より ——

藤 森 俊 輔

〔本調査の問題と分析枠〕

青年の生活意識を問題にする場合、よくみられる問題意識に次のようなものがある。第一は、青年がしばしば社会的規範からの逸脱を示しやすいものであるという認識のもとに、そうした観点から青年の生活意識を調査し、青年問題＝逸脱対策を検討するというものである。現代青年の行動の多くの特色を、成人の観点からみて是正すべきものとするのは、社会秩序を固定的に考え、一面的に青年に適応を要求するということにもなり、こうした問題意識からの調査は現状認識に歪みを与えかねないと思われる。第二は、より広い層に一般的に受け入れられている見方であるが、現代の青年問題とは「世代間の断絶」の問題に他ならないとする見方である。問題意識としては「成人の行動と青年の行動の間には社会構造の違いが介在しており、そうだとすれば、社会の機構や制度も新たな世代を包みこんでいくために改められなければならない側面をもっている」とする点で、第一の観点よりも柔軟ではあるが、「現代社会における青年問題は、成人と青年との行動があまりにも異質であるということから起っている」とする点では、共通の問題の視点に立っているといえるであろう。そして、しばしば、この観点到つ人は「世代間の矛盾は現代の状況の中で、場合によっては社会階層による矛盾よりも一層きわだった対立として社会全体に広がっている」とし、そうした事態の存在は「社会の存続・発展にとってきわめて大きな問題を投げかけている」とする。また、これらの論者によれば、青年問題の解決とは、成人世代と青年世代の間の距離をうめるということ、あるいは、青年を包みこめる社会機構や制度を追求することによって、社会の存続のために必要な機能を与える若いエネルギーを確保することだという観点をうち出すことになっている。(註1) 私はこうした世代間の差異に注目していく観点よりも、青年の生活体系のトータルな解明にまず焦点をおいて

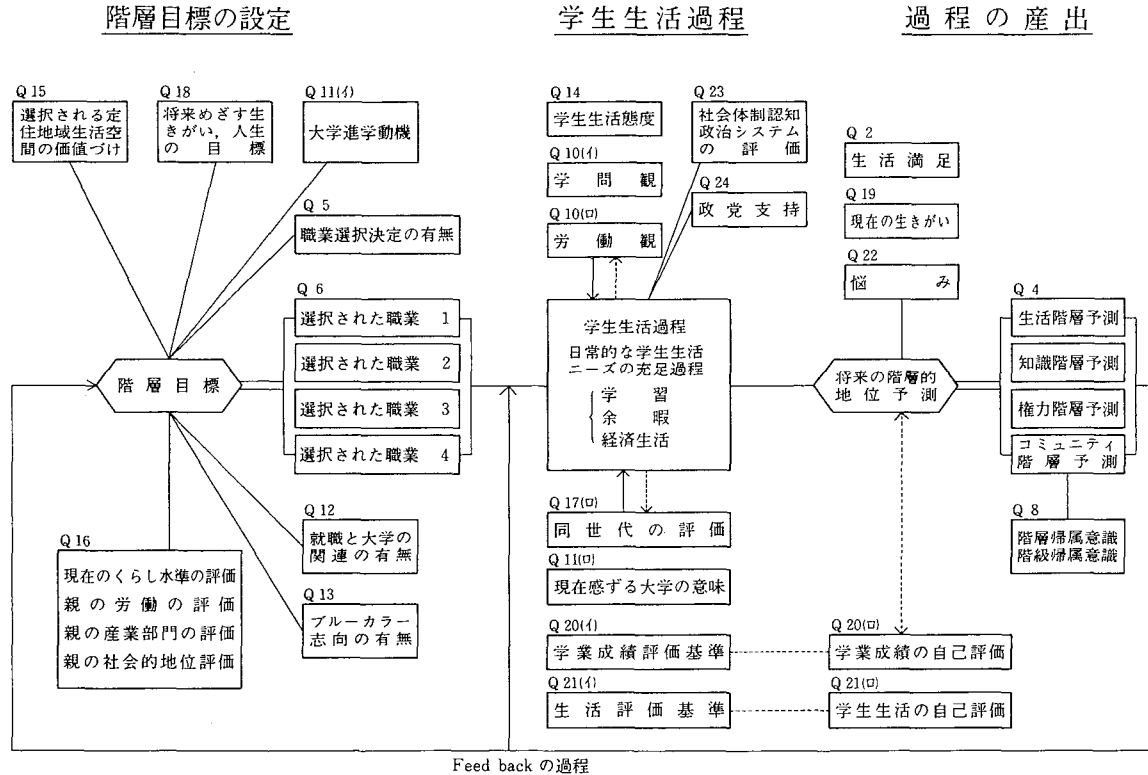
みる事が重要なのではないかと考える。特に、青年の自己実現を助け、その発達をはかる教育の現場の課題などを考えるとき、そうした基礎的な実態分析が必要なのではないかと考える。そうした観点にたつとき、青年の生活を青年としての発達課題を追求する過程としてとらえて行く事が重要となるだろうと思われる。こうした視点からの研究は「社会化」の問題として、今日議論されているようだ。

青年期の発達段階の課題としてあげられるものはいろいろあるが、なかでも「職業を選択し、準備すること」は、もっとも重要な課題の一つであり「職業的社会化」の問題としても青年論研究の一つの重要なテーマをなしている。(註2) この課題は階層として青年をとらえて行くという事であり、今回行なった調査において、青年の生き方がとらえられるときの問題の焦点となっている。

本稿は、「学歴社会と青年の生き方」というテーマで行なった調査の一部を中間報告として提出するものである。この調査自体は、岡山大学という一地方国立大学を取りあげて、そこにおいて「学歴社会」が学生たちの「生き方」にどのような影響を与えているのかを明らかにしてみたいという希望のもとで行なわれたものである。調査はおおよそ、次のような図に示される仮説のもとで設計された。このような課題を解明するに当って、三つの主要なサブテーマが生ずる。第一は、「学歴社会」(社会構成員に対して職業ないし職業的地位を配分する原理または規則の体系の中で、学歴が占めるウェイトのきわめて高い社会)の中で、学生たちがどのような階層に属し、また、どのような階層目標を設定しているのかを明らかにすることである。第二は、学生たちの学生生活全体がどのような生活意識のもとで営まれているかを明らかにする事であり、第三は、こうした学生のいわば「生き方」を第一の階層目標を達成する営みとして、すなわち階層行動としておさえてみる事がどの程度できるのか、また、そのように理解してみると、どんな特色をもつものという事ができるのかを明らかにする事であった。本稿は、その第二の課題についてのみ記述したものである。これを独立の報告とするのは、現代の大学生がどんな生活意識をもっているのかを記述する事は、それ自体で独自の関心の対象たりうるだろうと判断したからでもある。ここでは、学生の「生き方」という事を日常的な生活意識レベルで問題としており、調査に馴染み易いこうしたレベルの解明に終始している。

さて、調査は、学生に対してその生活意識、階層意識、職業選択などについて質問した調査票(B票)と、その両親、特に世帯主である親に対して、学生の家族的背景について

図一 1 学歴社会と青年の生き方の分析枠組み



質問した調査票（A票）の二種を用い、郵送法によって行なわれた。被調査者は、全学生の中から単純無作為に $\frac{1}{6}$ が抽出されたが、今回集計されたものはA・B票ともに揃った535ケースで、抽出サンプルの約4割であり、結果的には母集団の6.7%にあたるケースとなった。この調査は郵送法の欠点を免がれるものではないが、各学部・学年の内訳で検討してみると、表1にみられるごとく、偏りという点からみても、まずまずの回収だと考える他ない。

さて、学生の「生き方」については、次のような分析枠で考えてみたい。図2で示される生活体系の概念図は、一般に諸個人の生活状態を生活過程としてとらえる事に力点を置きつつ、それを構成する諸要素の連関として示したものである。n箇の「要求一活動過程一充足」の過程の体系として示される生活状態は、大学生の場合、基本的に「学習生活」「余暇生活」「経済生活」などの生活領域に分けることができよう。これら生活領域において、学生の生活諸要求がどのように充足されているか、その生活の状態はどのようなものかは、客観的には inputs としての利用しうる諸資源（仕送り、アルバイトなどの収入、大学施設などの社会的共同消費手段、講義など）、生活諸関係（友人、クラブ、ゼミ、研究

表-1

(イ)学部別：サンプルと母集団の対照

学 部	各サンプル数 集計総数	各学生数 学生総数
法 学 部	8.6%	8.5%
経済学部	9.9%	8.4%
文 学 部	8.0%	7.3%
法 学Ⅱ	3.2%	4.3%
経 済Ⅱ	2.1%	3.8%
教育学部	28.0%	21.8%
理 学 部	5.4%	6.5%
医 学 部	7.5%	9.3%
歯 学 部	1.5%	2.0%
薬 学 部	3.9%	4.1%
工 学 部	15.5%	17.3%
農 学 部	6.4%	6.9%

(ロ)学年別：サンプルと母集団の対照

入 学 年	各サンプル数 集計総数	各学生数 学生総数
49年	0.2%	0.2%
50年	1.3%	0.9%
51年	1.5%	2.4%
52年	5.6%	5.3%
53年	19.1%	20.6%
54年	20.6%	21.7%
55年	24.5%	24.7%
56年	27.3%	24.3%
性 別	男	69.5%
	女	30.5%

会、クラス、同窓会 etc.)、生活活動過程の様式(学習の仕方、余暇の過ごし方、生活時間の配分 etc.)、配分をうける活動の報酬(成績、単位などの資格取得、同輩の評価、etc.)、享受量などとしてとらえることができよう。(註3)「生き方」の問題とここでいうのは、こうした生活体系がどのような要求を、どのような指向のあり方によって、どう充足しているのかの主観的側面を意味している。そして特に指向における価値標準を主要な要素として生活意識をとらえる事を意味しているものである。一般に「生活意識」は次のような六要素からなるものと考えておきたい。(註4)

以下、逐次これらの意識要素について、現状を記述して行こう。

図-2

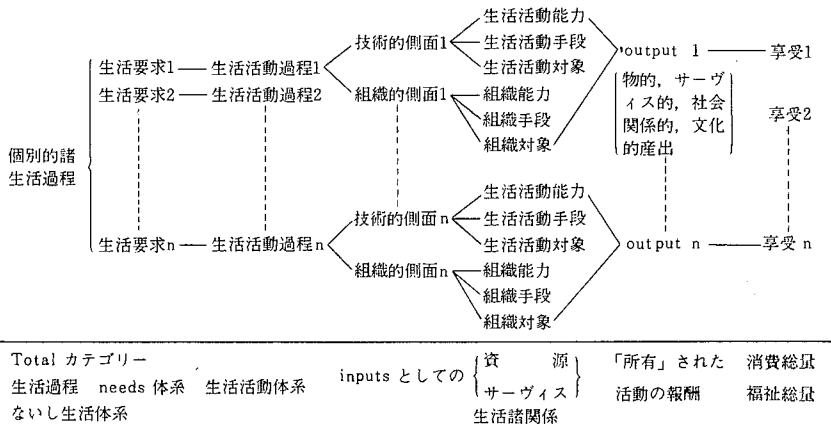


表-2

行為志向の要素 \ 生活意識	生活活動志向様式	享受に伴う意識
志向の認知様式	状況認識	現状批判的もしくは肯定的意識
カセクシスの様式	生活選好	生活満足, 不満足
評価, 価値志向	生活価値	生きがい

〔生活満足意識の構造〕

生活満足意識とは、図2における各生活領域の生活要求—活動過程に対応して、その要求がどれだけのようになされたかの結果についての意識と定義しよう。

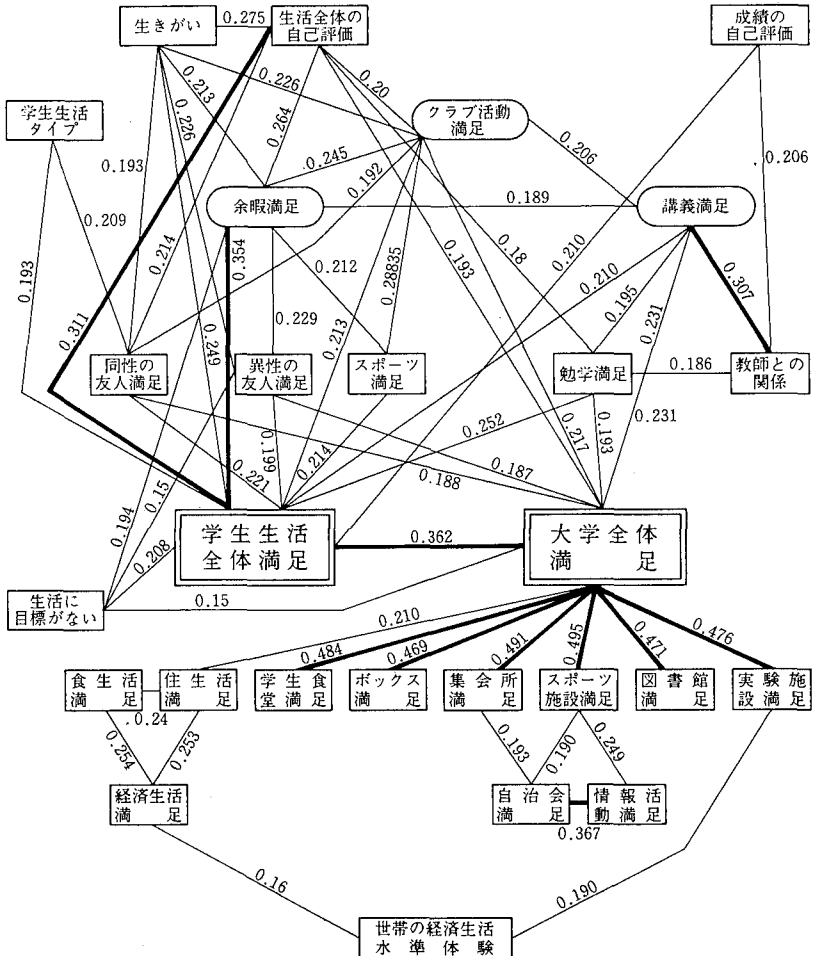
各生活領域の生活要求は、生活価値意識などと結びついて Needs disposition 要求性をなして、それぞれのニーズに対する重要度の意識を形成し、またニーズが現にどれだけ満たされているかに関連して、切実度の意識となり、これら二つの構成物として生活要求という意識要素をなしていると想定されうる。満足はこうした要求の強さと関連し、客観的な生活条件——例えば配分される諸資源の量——に規定されつつも、相対的に自立して、独自の尺度によりつつ充足結果を評価的に測る結果としてでてくる意識といえるのではないだろうか。

ともかく、生活意識を構成する諸要素との一定の連関の構造抜きに生活満足意識をとらえる事はできない。図3「生活満足意識の構造」は、そうした満足意識の構造をとらえようと試みたものである。線でつながれた二変数の関係は、クラマー係数0.2以上のものを一応何らかの相関があるものとみている。そして、ほとんどすべての生活満足を構成する意識要素間に0.2前後の相関がみられた。

まず、学生生活満足そのものの構造をみてみよう。全体の生活満足意識の中心になるものは「大学そのものについて全体として満足していますか」という問いに対する回答としてひき出されたもの（大学全体満足）と、「学生としての毎日に全体として満足していますか」という問いに対する回答としてとらえられたもの（学生生活全体満足）である。

「学生生活全体満足」に相関する生活満足要素の関連構造を図3にみると、三つの下位の中心的領域があることがわかる。それは「余暇満足」「クラブ活動満足」「講義満足」である。この三つはいうまでもなく学生の大学生生活における主要な生活領域に他ならない。この三領域の中で「大学生生活全体満足」度にもっとも大きく貢献するものが、「余暇満足」度であって、余暇満足度の高いものが、学生生活全体満足度が高いし、その逆も成り立つ関係にある。この「余暇満足」と相関する満足要素は、「クラブ活動満足」「異性満足」「スポーツ満足」であり、これらは、直接に「学生生活全体満足」と相関するが、「余暇満足」に強い相関関係をもっている。余暇に「満足」か「やや満足」を示す学生たちのそれぞれ60%以上がクラブ活動に満足を示している。クラブ活動は、図3で明らかのように、単に

図-3 生活満足意識の構造



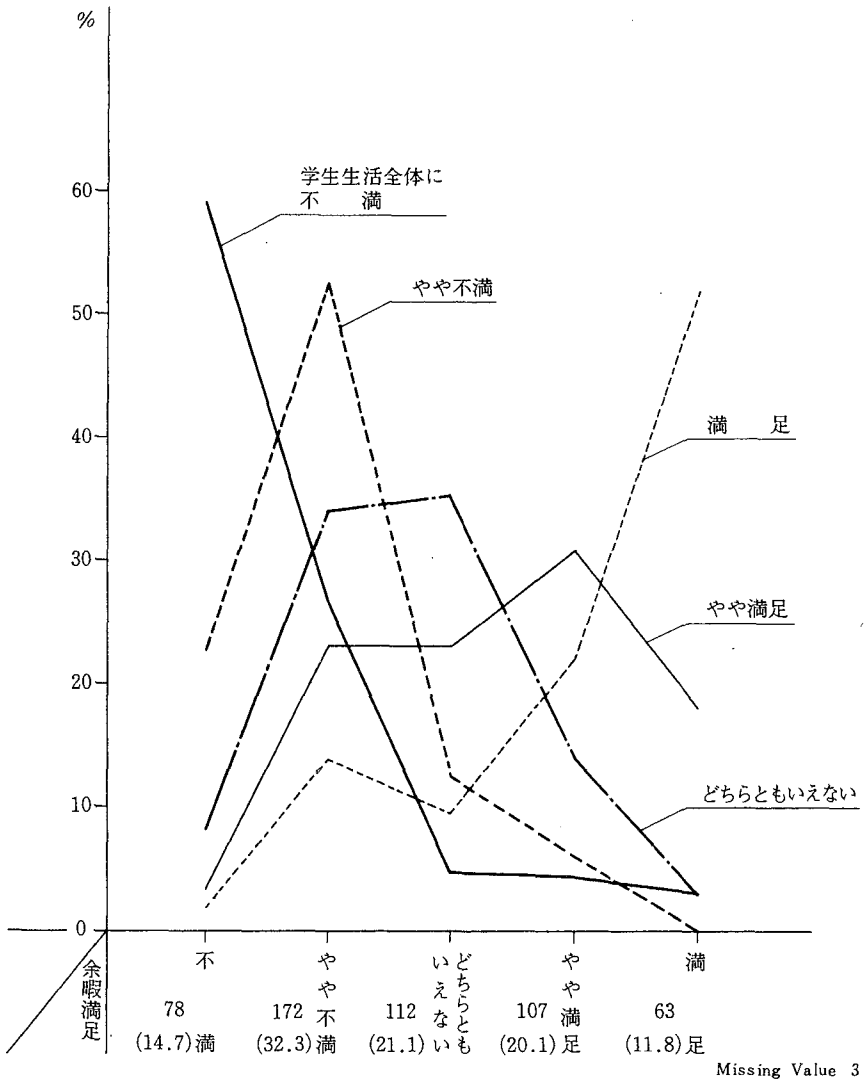
表—3

次の各項目について、あなたは現在、自分の学生生活について満足していますか。
該当箇所には○をつけて下さい。

(数字は%)

		5 満 足	4 や 満 や 足	3 ど ち ら ど も い え な い	2 や 不 満	1 不 満
質問 1	あなたは現在のあなたの食生活に満足していますか。	30.5	31.2	16.8	16.6	4.9
質問 2	あなたは現在のあなたの住居(主としてあなたの部屋)に満足していますか。	34.6	30.8	9.3	18.5	6.7
質問 3	あなたは現在あなたの勉学の成果について満足していますか。	2.8	15.5	35.2	26.9	19.3
質問 4	あなたはあなた自身のくらしむき(経済生活程度)に満足していますか。	27.1	32.7	19.1	16.8	4.1
質問 5	あなたはあなたの現在の余暇の過ごし方に満足していますか。	11.8	20.0	20.9	32.3	14.6
質問 6	あなたのスポーツ活動は身体をきたえ、心身とも健康を維持するという点で満足していますか。	17.0	16.1	20.4	23.8	22.6
質問 7	あなたは同性の友人関係に満足していますか。	27.7	38.9	18.1	11.8	3.6
質問 8	あなたは異性の友人関係に満足していますか。	14.2	14.0	37.4	17.0	17.4
質問 9	あなたはクラブ・同好会活動には満足していますか。	17.0	23.2	35.3	12.1	10.1
質問 10	あなたは大学の講義・ゼミ・実験などに満足していますか。	4.1	21.9	37.2	26.7	9.4
質問 11	あなたは教師とのふれあいに満足していますか。	3.4	10.1	37.4	27.5	21.3
質問 12	あなたは自治会の現状について満足していますか。	0.4	1.7	64.3	15.5	17.6
質問 13	あなたは学生自身の情報紙・誌、ビラ・広告などの意見・情報交流の現状に満足していますか。	1.1	5.0	50.8	25.1	17.4
質問 14	あなたが利用できる大学の体育・スポーツ施設に満足していますか。	6.7	17.9	33.1	23.0	19.1
質問 15	あなたが利用できる図書館について満足していますか。	14.6	32.9	25.8	18.5	7.5
質問 16	大学の実験施設・器具などに満足していますか。	6.4	20.6	52.2	12.9	7.1
質問 17	あなたは大学の学生食堂に満足していますか。	3.6	14.0	14.2	31.8	35.9
質問 18	大学の学生用の談話室、集會室、休養設備について満足していますか。	4.3	14.6	32.7	27.3	20.7
質問 19	あなたは、クラブのボックスについて満足していますか。	3.0	7.5	38.9	19.6	27.9
質問 20	あなたはこの大学そのものについて全体として満足していますか。	8.0	40.9	25.2	18.0	7.1
質問 21	あなたはあなたの学生としての毎日に全体として満足していますか。	8.8	37.8	19.1	24.3	9.9

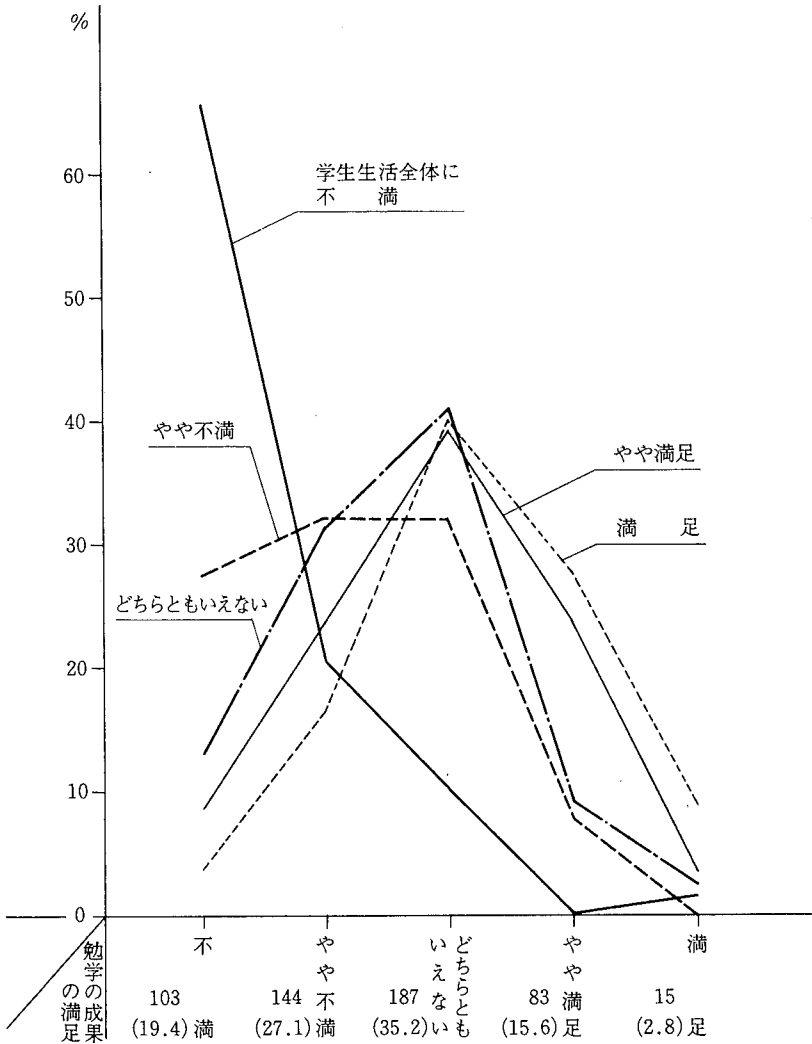
図一 4 余暇満足と学生生活全体満足



余暇活動のみにかかわるものではないが、しかし、主として余暇領域とかかわっている。異性の友人関係への満足は余暇満足ともしっかりと強く相関している(0.229)。異性の友人関係に「満足」を示す者の50%、「やや満足」の約40%は、余暇に満足を示し、「不満」の65%、「やや不満」の59%が余暇に「不満」ないし「やや不満」を示している。「余暇の満足」は、こうして、全体として学生生活が満足であるか否かを規定するもっとも中心的な生活領域であるが、内容的には、全体として47%の学生が余暇生活に「不満」ないし「やや不満」であると答え、32%の学生が何らかの満足を示しており、むしろ不満が目立つ生活領域ともいえ、「学生生活全体満足」度を引き下げの方に貢献しているといえそうだ。後でみるように、学生にとって「余暇」の意味は大きく、それを重視しており、その意味からも少々充足では物足りないという面もあるだろう。「学生生活全体満足」に利いている要因として相関度の高い要素は、その他に「スポーツ満足」「同性の友人関係の満足」がある。すなわち、余暇活動の満足の一つの生活の中心として、スポーツと異性、それから友人とのふれ合いの満足が学生生活の全体の満足度を大きく規定している。「同性の友人関係満足」は、何よりももっとも高い満足度が示される生活領域であり、66%の学生が友人関係に満足している。クラブ活動も不満よりは満足している学生の多い領域であるが、表3が示すように、総じて「余暇」にかかわる生活満足要素は、不満を示す者の方が多い事が目立っている。それに対して、食生活、住生活、経済生活の全体の満足度は、全体として60%程度の学生が「満足」ないし「やや満足」を示す満足度の二番目に高い生活領域であるにもかかわらず、学生生活の全体としての「満足」に相関することが少ない。

それに対して、本来の「勉学の成果についての満足」はどうなっているのだろうか？というまでもなく「勉学の成果についての満足」も、「学生生活全体満足」に相関している(0.252)。しかし、この領域も現状においては「学生生活全体満足」度をひきあげるよりもひき下げるほうに貢献しているといえよう。勉学に「不満」を示す19%の学生のうち、67%の学生は、学生生活全体に不満を感じている。逆に勉学生活に何らかの程度の満足を示す18.4%の学生のうちの65%は学生生活全体に対しても何らかの程度の満足を示し、わずか11%が何らかの不満を示しているにすぎない。しかし、「勉学の成果に不満、ないし、やや不満」を感じる学生は全体の46.5%を示し、基本的に「勉学の成果」をあげえない学生がほぼ半ばを占めている実情を示している。「講義に対する満足」は「教師とのふれ合い」と大きな相関を示しているが(0.307)、「教師とのふれ合い」に対しては、もっとも大きな

図一 5 勉学の成果と学生生活全体満足



(注) 数字はケース数, () 内の数はその全体にしめる%を示す

不満が集中しており、49%の学生が何らかの不満を抱えているとあってよい。特に教養部の学生の不満は大きく2年生の68%は何らかの程度「不満」だとしている。「講義満足」は、学生生活全体の満足と相関すると同時に、「大学全体満足」ともかかわって、一つのサブ核をなしている。

さて、生活満足意識において下位の中心をなすものの一つは、「クラブ活動」である。「クラブ活動の満足」は「勉学の成果」の満足度とは殆んど相関をもたず(0.12)「講義への満足」と相関するが(0.206)、むしろ「余暇」領域と強く相関するスポーツ、および友人関係満足と相関して「クラブ活動」が余暇的なものとして学生生活体系の核的位置を占めている事をうかがわしめる。

さて、次に中心的な生活満足意識の一つである「大学全体満足」についてみてみよう。学生自身の生活活動と関連する生活満足要素のうち、常識的にみて、講義(0.231)学習成果(0.193)教師とのふれあい(0.227)が相関するのは当然と思われるが、圧倒的に強い相関度を示しているのは、生活環境資源ないしは社会的共同消費手段としての大学という次元である。大学は、どちらかという和学生にとって利用すべき施設として大きな関心の対象となっているように思われる。

施設空間ないし、利用すべき社会的共同消費手段としての大学として、著しく不満が目立つのは学生会館であるようだ。施設空間としての大学は、図書館を除いて、いずれも満足の対象というよりも不満の対象であり、実験施設のみが「どちらともいえない」が50%をしめている。

次に、学生の自治的な活動領域についてはどうであろうか？この領域についてまず目立つのは、「どちらともいえない」という答えが圧倒的に多い事である。自治会については64.3%が、学生自身の情報誌・紙などを通じてのコミュニケーション活動については50.8%が、「どちらともいえない」とのべ、関心の対象外であるかの如くであり、また不満を感じずるものが、それぞれ33%、42.5%に上るのに対し、現状に満足を示したものは、それぞれ2%、6%にすぎなかった。しかし、興味あることは、これらは大学全体満足にも、学生生活全体満足にも直接の相関をもたないが、学生会館、スポーツ施設などを媒介項として大学全体満足と関連するかの如くであり、自治会などの学生自治活動は、利用する資源としての施設に対する不満と主として関連して、不満であるという位置づけのように思われる。その他学生生活活動との関連の中ではボックスとクラブ活動の相関がもっとも高

く(0.23), ここでも学生自身の主体的活動とのかかわりでは, 余暇性の強い大学施設資源に対して, 不満も強く関心も高いといえるように思われる。図書館・実験施設に対する不満は少なく, 余暇空間としての大学に不満が集中しているといつてよい。

以上を小括すれば, 学生にとって学生生活全体も大学全体も比較的満足の度合いが低い状態にあるのではないかと思われる。それぞれ46%, 49%の何らかの満足を示す学生がいるのではあるが, 平均的に常にいつでも, 個別領域の不満の大きさにかわらず, 60%以上の人が何らかの満足を示すのが, この種の生活全体満足調査の通例であるところをみると, この数字はいささか気になる満足度の低さであるといえそうだ。(註5) 個別の生活要求についても何らかの満足の高さを示しているのは, 経済生活と友人関係だけであって, ついでクラブ活動に50%の学生が満足を示しているが, 学生生活満足意識の中核にある「余暇」についても, 本質的に生活活動体系の柱となるはずの「勉学・学習」「講義」「教師とのふれ合い」についても不満の学生のほうが多いという事になっている。また利用すべき手段・資源として主として意味づけられているかの如くである「大学全体」についても, 学生の余暇生活や厚生福祉の文脈からは, きわだって不満が示されているといえるだろう。学生自身が形成する自主的集団についていえば, 「クラブ」は余暇的なニーズ充足に主として関連するものとなっており, 自治会や自主的コミュニケーション媒体は圧倒的に「ドチラトモイエナイ」意識の対象であるか, 不満の対象であって, 自治活動の沈滞を明確に示しているといつてよい。

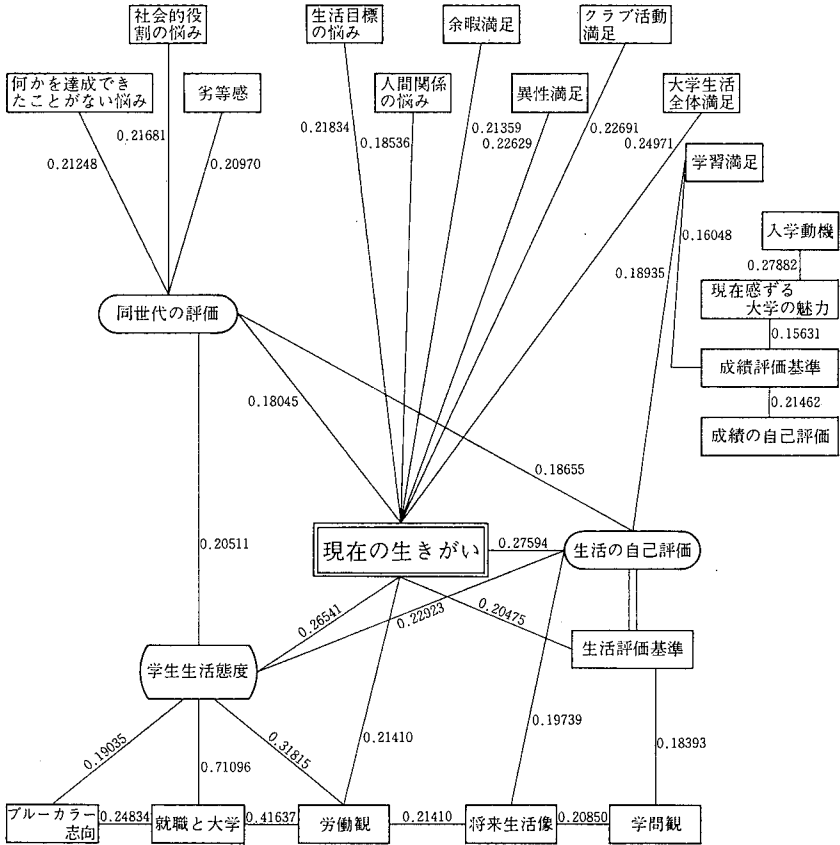
〔生活価値意識の構造〕

生活価値とは, 生活要求を充足する生活活動において, 最適の行動を選択する際に依るところの評価尺度, 人々によって内面化され, 人々の行動に秩序づけを与えるところの中心的基準をさすとする。「生きがい」とは生活活動の諸結果がこのような基準によって意味づけられる限りにおいてえられるところの充実感の意識とすることができよう。

さて, 学生の生活価値観の構造を図式化すると図6の如くなる。

調査された生活価値意識要素の中で, もっとも中心的な位置をしめるものは「現在の生きがい, 生活の充実感」である。この項目は, どのような生活活動を行なっているときに, もっとも充実感を感じるかを問うたもので, 27.7%の学生は「友人や仲間といるとき」と答え, 23.4%は「スポーツや趣味にうちこんでいるとき」と答えている。ついで14%の学

図一6 生きがいと生活価値観



生が「クラブ活動」と答えている。これらを合計すると、65%の学生は、いずれかという
と余暇的な生活領域に生活の充実感を感じている事になる。これに対し「勉強のうちこん
でいるとき」12.7%、「講義などに参加しているとき」2.8%で、ほぼ15%の学生が学生と
しての仕事の生活領域に充実感を感じている。(註6)

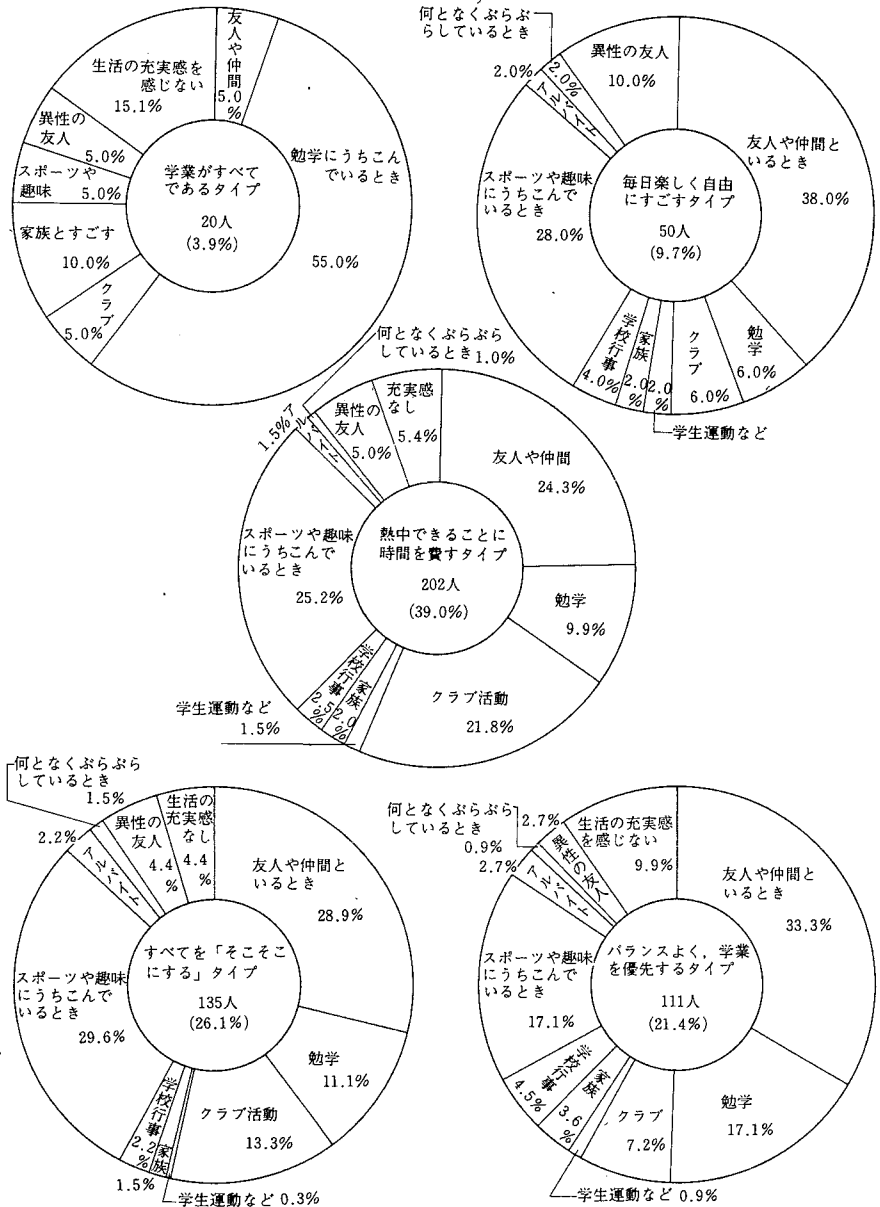
この「生きがい、ないし充実感」ともっとも強く相関する価値意識要素は、当然ながら
学生生活においてどのような生活領域、あるいは生活活動に中心的意味をおくかの、中心
的生活価値観を基準にして自己評価された「生活の自己評価」の要素である。「生活の中心
的価値」とここでよぶものは、学生生活領域のうち、学業、クラブ、余暇などのいずれを
もっとも優先させるかに対する回答であり、約40%の学生は「クラブ活動など熱中できる
事」を学業に優先させると答えている。ついで26.4%は、学業もクラブも余暇も「そこそ
こに」バランスをとってやっていると答えている。それに対して「学業こそ」を他の何よ
りも優先させると答えたものは、わずかに3.7%にすぎず、「毎日の生活を楽しく自由にす
ごすこと」が一番だと答えた者9.3%よりも少ない。学業優先型ではあるが、他を犠牲にし
ることは馬鹿げており、「そこそこに」楽しむのがよいとする20.9%の学生を含めて、約24
%が学業優先の価値観をもっているにすぎない。確固として学業を生活のもっとも中心的
な価値におく者が3.9%にすぎないのに対して、確固として「学業を犠牲にしても」熱中
できる事をとるタイプが4割いるという事はきわめて特徴的な事実である。

こうした中心的生活価値観からすれば、どう自己の生活の充実度は評価されるのか？
56%の学生が何らかの意味で「充実している」と答えている。それに対して「不十分」ない
し「空虚」だとする者は、約40%である。どのような価値観とこの充実感の程度は結びつ
いているのだろうか？

こうした「生活評価基準ないし、中心的生活価値観」と「現在の生きがい」の関連は図
7の如くである。すなわち「学業がすべてである」とする中心的価値の学生以外は、大よ
そのところは大きく、学習中心の生き方をし、また学習に生きがいを感じる学生は、レ
ア・ケースであるとみる事ができよう。若干の差異として、「熱中できる事」に中心的意味
を与える学生の中にクラブ活動を生きがいとする者が多少目立ち、バランスよく学び遊ぶ
タイプにわずかながら学習に生きがいを見出すものが目立つという特色がみられるが、有
意な差といえるほどのものではない。

こうして「生きがい」は中心的生活価値観と一定の相関関係を持ち、量的に支配的な「熱

図一 生活評価基準別現在の生きがい



中できるもの」を優先したり、すべて「そこそこ」にやっけて行く学生たちの「現在の生きがい」が、趣味、クラブ活動、友人関係である事が明確になったと思われる。そうした文脈の中で「まあ充実している」と考える47.8%の学生の「生きがい」は、28%が友人であり、24%が趣味、15%がクラブである。学習と答えたものは約14%である。また「十分に充実している」と答える者の32%がクラブ活動であり、21%が友人関係であるが、20%の学生が「学習」と答えている。

こうして、多数派の学生の「価値観」「生きがい」、毎日の生活の体系化の軸が学習ではなくて、余暇的色彩の強い趣味、クラブ活動、友人関係であり、そうしたものに「熱中できる事」を求め、あるいはすべてを「そこそこに」楽しんで、全体の40%が友人や余暇的なもので「ほぼ充実する」ないしは「充実している」のに対し、12.8%の学生が学習を生きがいにし、8.3%の学生が学習に生きがいを見出して、かつ「まあ」もしくは「十分に」充実しているという事になっているとまとめられる。後にみるように、多くの学生は政治的支持の対象をもち、またすでにみたように学生運動、自主的情報活動に殆んど関心を示さぬかのように思える。このように彼らは社会的活動領域にほとんど意義を見出さず、私的領域にもっぱら価値を見出し、また仕事の領域よりも、余暇的な領域に価値を見出して充実感を感じているといつてよい。

では、大学というものに対して、どのような意味づけをし、入学してきたのだろうか？ また、現在、彼らは大学にどんな意味づけを与えているのだろうか？

単純集計表をみてみよう。進学決定の際の大学の一番大きな魅力を「学問を身につけ、人格をたかめる」「科学的合理的精神を身につける」というように学問を習得するところにおいている者が23%いるのに対し、実利型 ((2)+(3)+(5)) は41.3%であり、余暇型 ((1)+(6)) は28.8%となって、学習型：余暇型：実利型は2：3：4の割合になっている。

これに対して、現在、大学に対する魅力をどこに一番にみているかをみると、同じく学習型：余暇型：実利型は2：3.5：3.5となって、全体として実利型が減り、それだけ余暇型が増大しているという推移をみせている。

もう少し詳しくこの変化についてみてみれば、とりわけ著しい変化をみせた者は、大学の意味を「エリート・コース」にみたもの (-8.4%) 及び「能力・実力をつけることができる」点にみたもの (-3.9%) が減少し、一方で「学んだことを実社会で生かす事ができる」(+6.7%) というように増大するが、他方で「青年期をすこす楽しい場」と割切っ

表一 4

あなたにとって大学進学決定の際の大学の一番大きな魅力は次のうちどれにありましたか？現在はどれですか？ 下記の空欄に番号を記入して下さい。

1. 4年間自由な生活が送れる。
2. 卒業後の昇進に有利（エリート・コース）
3. 実力主義，能力主義社会で有利な実力をつけられる。
4. 学問を身につけ，人格をたかめる。
5. 学んだ事を実社会で生かすことができる。
6. 青年期を過ごす一つの楽しい場である。
7. 科学を学び合理的精神を身につける。

回答	進学決定の際		入学後現在	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1	93	17.4	63	11.8
2	66	12.3	21	3.9
3	54	10.1	33	6.2
4	109	20.4	93	17.4
5	101	18.9	137	25.6
6	61	11.4	127	23.7
7	15	2.8	21	3.9
回答なし	36	6.7	40	7.5
計	535	100.0	535	100.0

進学決定の際

入学後現在

て行く者が大きく増大している。(＋12.3%)これに対して入学動機が学習型である者の比率はほとんど変化を示さず，2%の減があるにすぎない。しかし，クロスをとってみると，どのタイプも入学後にかなり大学の意味づけを修正しており，入学後の体験が重要であるように思える。

さて，大学の学生生活上の意味づけにおいて，このようにそれを学習の場としてとらえる者が少ないとすると，彼らの学習生活の望ましきの尺度は成績ないし学習目的達成の程度としてはどのようなものであろうか？果して達成目的が単位さえとればよいというように非常に低いところにおかれているのだろうか？

表5のように，彼らの達成目的水準は，決して低いとはいえないだろう。「少なくとも専門，あるいは，すべての科目で優であることが望ましい」とする者が70%に達する。「少なくとも単位取得できればよい」とする者は13.8%にすぎない。にもかかわらず，ほぼ70%の者がそれぞれの基準からみてその学習成果を「不十分なしあまり十分でない」としている。

表一 5

- (イ) あなたは、自分の学業成績がどの程度であるのが望ましいと思いますか。自分の考えと合致するところに○をつけて下さい。
1. できるかぎり、すべての受講科目が優であることが望ましい。
 2. 少なくとも専門に関する科目は、できるかぎり優であることが望ましい。
 3. 教養・専門いずれによらず、できれば半分以上は優であることが望ましい。
 4. 専門は別だが教養科目は、単位取得できればよい。
 5. 教養・専門いずれによらず、少なくとも単位取得ができればよい。

回答	(人)	(%)
1	169	31.6
2	209	39.1
3	81	15.1
4	38	7.1
5	36	6.7
回答なし	2	0.4
計	535	100.0

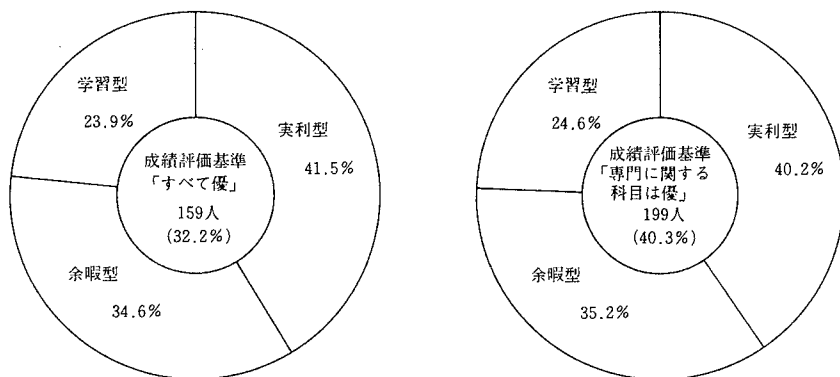
- (ロ) 上記の目安からいうと、あなたの学業成績は現在十分な結果を生んでいますか。
4. 思っている以上に十分である。
 3. ほぼ目安通りにしている。
 2. あまり十分ではない。
 1. まったく不十分である。

回答	(人)	(%)
4	11	2.1
3	136	25.4
2	274	51.2
1	99	18.5
回答なし	15	2.8
計	535	100.0

学業成績の達成目標の設定とそれによる自己評価は、大学の意味を何にみて入学したのか、現在、大学の意味を何にみているのかについての三つのタイプとどんな関連にあるのだろうか？

「単位がとれればよい」とする安易な学生たちにおいては、やはり余暇型の学生が多く、ほぼ半数をしめているが、絶対数の分布をみると、どのタイプの学生も、実利的であれ、「自由に楽しむ」事を優先させるのであれ、成績が「すべて優もしくは専門だけはすべて優」である事を望ましいとしている事には変りはない。学習が生活のなかで中心的価値として位置づけられていない以上、学習の価値の重視に結びついた達成目標の高い水準

図一 8 大学の意味づけと成績評価基準



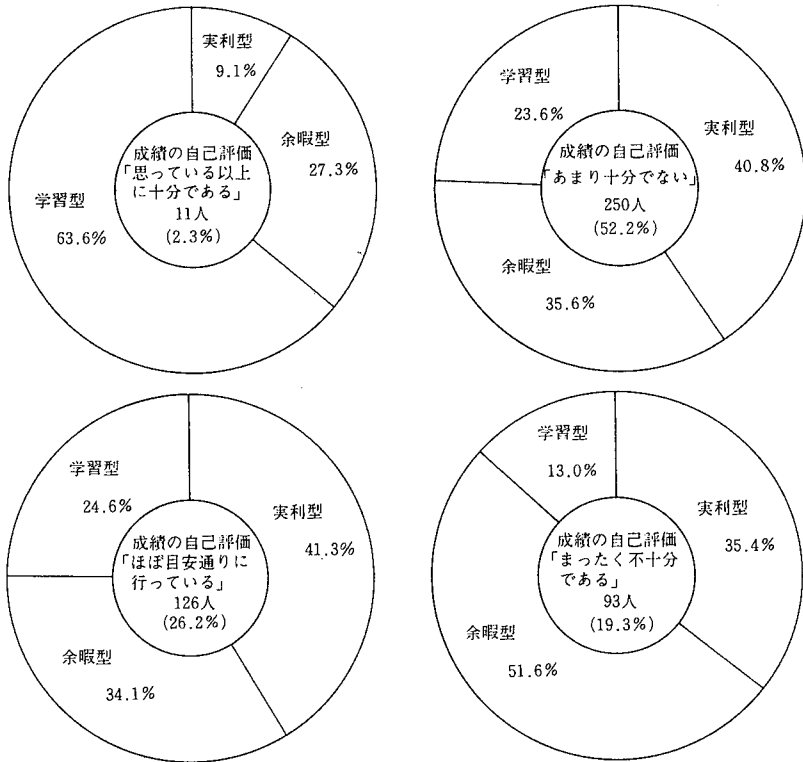
での設定というよりも、学習を他の目的のための道具的な意味において重視していることのあらわれと考えられる。

また、学習型であっても評価基準が他よりも高いものが多いということはない。しかし、それぞれの評価基準において成績結果をどう評価しているかをみると、やはり「十分である」とする者の63%が学習型であるし、「まったく不十分」とする者の55%が余暇型となっているという事がいえるように思えるが、しかし、どの型をとってみても基本的に50%以上が「十分でない」としている事に変わりはない。

学業成績が十分であるかどうか、学業成績達成目標の水準設定は「生きがい」のあり方にも直接の関連はないが、学生生活全体の「充実度」についてみると、「学生生活全体が空虚」ないし「あまり十分でない」としている者の80%が学習の成果が「不十分」ないし「あまり十分でない」としており、なかでも「空虚である」とする者の51%が成績が「不十分」だとしているのに対し、「十分充実している」とする者で成績が「不十分」だとする者は、12.5%である。いずれにしても、全体として、成績結果についての自己評価は、非常に低くなっている。

生活価値意識の構造という点からみると、学業に関連する価値観は、むしろ何らの核的位置をもしめていない事に注意しておきたい。むしろ、学業か余暇かの二者択一において余暇ないし「熱中できるもの」を選択し、こうした余暇を中心とした価値を軸に生活の意

図一 9 大学の意味づけと成績の自己評価



味が問われ、また、余暇の意味や余暇欲求の充足が生活意識の中軸となって、現在の「学生生活の生きがい」に強く相関していると考えられる。大学の魅力を「余暇」にみるか、「実利」的にみるかのいずれかのタイプで7割をしめ、これらの学生にとって、成績はできるだけ優でなければならぬにしても、結果において、過半が「あまり十分でない」と評価せざるをえない状態であるが、学業は価値意識の上で核的位置をしめておらず、学業成績が低くても、それは学生生活の充実を損うものではなく「学生生活全体」は意味の上で「まあ充実している」と考えている者が50%弱となっていると小括できよう。充実感が浅く、また仕事の領域の達成度の低さが学生生活に影をおとしている事は見逃せない。

きて、青年期にある学生がもつ悩みはどのようなものでしょうか？

ほぼ2人に1人の学生が「いつも悩んで」いたり、「時々悩む」ものに自我の確立に関する悩みがある。「自分自身の本当の姿がつかめない」(56%)「何をすべきかよくわからない」(49.5%) また、3人に1人以上悩みをもつものとしては、「自分を理解してくれる人は誰もいない」(43.2%)「今まで何か達成できたことがない」(38.9%)「自分は他人より劣っている」(37.8%)と、孤独に悩み劣等感をもっている。

また4人に1人が、「自分が現在している勉強は自分に適していない」(25%)と、脱落感におちこんでいる事は大いに問題となるところだろう。

さて、こうした悩みは、学生の生活意識の特色と何らかの関連をもつのだろうか？

まず、自我の確立に関連する悩みは、どのようなタイプの学生についても大きな差はない。学習成果や、充実のあり方、価値感の相異にかかわらず、いずれも同じように、自我の確立について悩んでいるといえる。しかし、「生活目標」が明確かどうかという点でいえば、「学習に生きがい」をもつものに、目標が明確である者の割合が多いのに対し、クラブ活動、学校行事、アルバイトなどに「生きがい」をみている者に比較的少ない。

人間関係への悩みは「同世代に認められているかどうか」という事と強い相関をもつようだ。また、人間関係に悩みをもつ学生に、「学生生活全体が空虚である」と感ずる学生が多い。

一般に、「同世代の評価」は、学生の悩みと相関が高い。「達成感」がない悩みをもつ学生は、同世代に無視されていると感じており、同世代に評価されていると感じる学生は達成感が高い。

同様に「競争に負けている」という劣等感についても、また「高度に発展する社会の中で役に立てないのではないか」という悩みも同様である。同世代が形成する集団の重要性がうかがわれる。学生生活にとって重要な生活諸関係がどのようなものか、参考までに掲げておきたい。

注目すべきは「自分は現在している勉強に適していないのではないか」という学習からの脱落感は、現在「大学の意味、魅力」を「自由な生活が送れる」「楽しい場所」ととらえる余暇型に意味づける学生に多いという点である。この点で、いつも悩む学生の68%、時々悩む学生の46%がそうである。

「自我の確立」にしろ「自信」にしろ、また「人間関係」にしろ、学生たちの悩みに強

図-10 人間関係の悩みと生活の自己評価

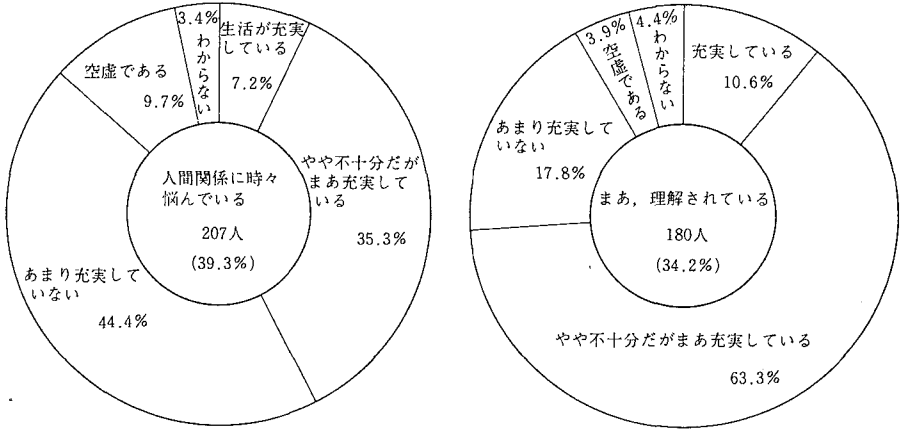
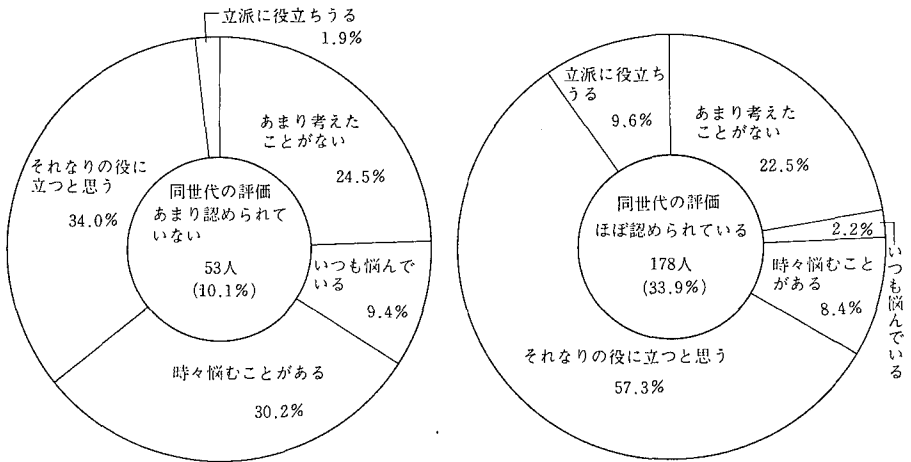


図-11 「高度産業化社会で役に立つ人間かどうか」の悩みと同世代の評価



表—6

あなたが所属している集団や社会関係を、次の11種に分類してみました。
下記の質問に答えて、該当する欄にいくつでも○印を記入して下さい。

		1 教 養 ・ 部 実 の 講 義 ・ ゼ	2 専 門 ミ 部 実 の 講 義 ・ ゼ	3 大 館 学 の 学 生 務 部 な ど 書	4 教 養 部 の ク ラ ス	5 学 部 団 の 自 主 的 学 習	6 自 治 会 ・ 学 生 会 な	7 ク ラ ブ ・ 同 好 会	8 政 治 団 体 ・ 宗 教 団	9 今 た 学 で 校 卒 業 同 窓 て き	10 寮 ・ 下 宿 ・ 近 隣	11 家 族 ・ 親 類	12 必 要 だ が 一 つ も な	13 ま っ た く 必 要 と し	14 そ の 他
質問 1	あなたにとって、現在、勉学上、不可欠だと感じている先輩、友人など、教師以外の人との人間関係はどこにありますか？ いくつでも○をつけて下さい。	人 54 % 10.1	230 43.0	26 4.9	193 36.1	68 12.7	21 3.9	242 45.2	17 3.2	203 37.9	121 22.6	138 25.8	25 4.7	16 3.0	35 6.5
質問 2	同様にあなたにとって、勉学上不可欠と感じている教師との人間関係はどこにありますか？	人 102 % 19.1	322 60.2	17 3.2	26 4.9	28 5.2	8 1.5	23 4.3	9 1.7	53 9.9	14 2.6	11 2.1	118 22.1	20 3.7	19 3.6
質問 3	あなたは学生生活を送るにあたって、生き方の問題、就職問題、政治的選択など、自分にとって重大な生き方の決定について心をうちあけて話し合いたいとき、不可欠と感じている教師以外の人との人間関係はどこにありますか？	人 9 % 1.7	90 16.8	6 1.1	101 18.9	28 5.2	6 1.1	177 33.1	16 3.0	206 38.5	90 16.8	274 51.2	26 4.9	28 5.2	58 10.8
質問 4	同様にあなたにとって生き方の選択について話し合える教師との人間関係はどこにありますか？	人 21 % 3.9	153 28.6	7 1.3	22 4.1	19 3.6	4 0.7	28 5.2	9 1.7	88 16.4	13 2.4	32 6.0	186 34.8	55 10.3	32 6.0
質問 5	食費のかしかり、アルバイトの紹介など経済生活上不可欠な人間関係はどこにありますか？	人 9 % 1.7	62 11.6	72 13.5	120 22.4	24 4.1	9 1.7	178 33.3	4 0.7	83 15.5	123 23.0	149 27.9	18 3.4	47 8.8	43 8.0
質問 6	あなたがスポーツ、勝負ごと、気ばらしなどの余暇生活を送るうえで不可欠となっている人間関係はどこにありますか？	人 6 % 1.1	77 14.4	3 0.6	126 23.6	31 5.8	1 0.2	288 53.8	10 1.9	183 34.2	125 23.4	60 11.2	18 3.4	15 2.8	65 12.1
質問 7	あなたにとって人に言えないような個人的悩みや不安(例 性、犯罪、成績不振、ハンディキャップ)が生じたとき不可欠と感じている人間関係はどこにありますか？	人 3 % 0.6	52 9.7	3 0.6	77 14.4	14 2.6	2 0.4	143 26.7	12 2.2	189 35.3	78 14.6	149 27.9	43 8.0	38 7.1	59 11.0
質問 8	総合してみると、あなたにとって現在毎日の学生生活を送る上でもっとも必要な集団はどれですか。一つだけ○をして下さい。	人 7 % 1.3	84 15.7	4 0.7	64 12.0	27 5.0	2 0.4	135 25.2	7 1.3	52 9.7	52 9.7	50 9.3	14 2.6	11 2.1	33 6.2

く相関する媒介要素は、「同世代の評価」である事がわかった。彼らは良かれ悪しかれ、青年として同世代の考え方、評価に準拠しつつ自我を形成しており、同世代との交流の中でパーソナリティのバランスを形成する必要性に迫られている学生の生活意識構造の一面が、ここに鮮やかに浮き出ているといえそうだ。

われわれは、この他にも生活体系をとりまく環境としての「社会体制」の7つの次元についての認知と政党支持についてアンケートをとってみた。7つの次元の間には相関関係がみられたが、しかし上記の生活意識要素と直接の関連はうすかった。この意識領域は独自の他の要因と関連し、上記の生活意識要素群と比較的に独立した意識領域を構成しているものと想像される。

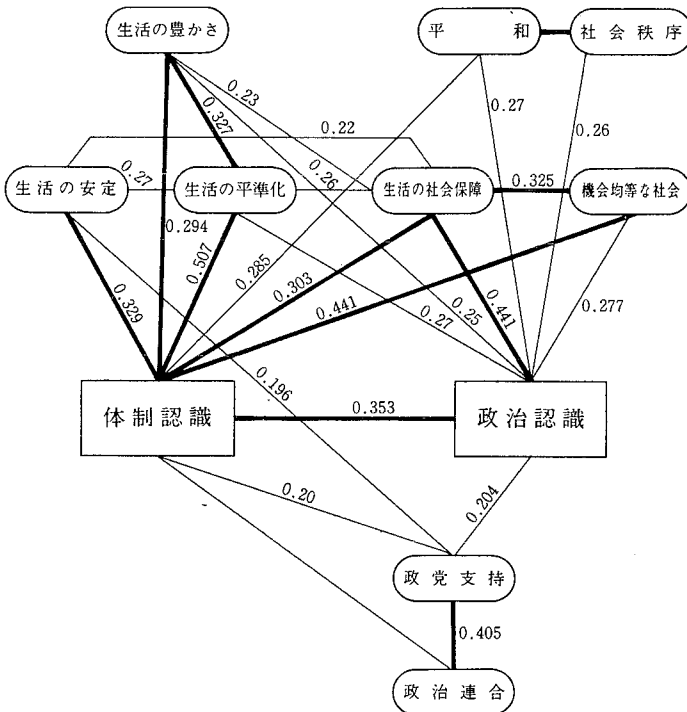
学生たちは、日常意識レベルで社会体制をどのように認知し、政治的路線をどのように選択しているのだろうか？こうした社会体制に関する認知構造を図解してみると、図12のようになる。

表7は「全体としての日本の現在の社会体制について肯定・満足しているか否か」を問うと同時に、社会体制の様々な次元を7つの問いに分解して設問してみたものである。殆んどどの項目に対して「満足・肯定的」に現状を認知している学生は少なく、殆んど50%以上の学生が各項目に対して何らかの程度で「不満・批判的」に認知している事がまず目につくだろう。とりわけ、政治が人々の利害を公正に反映していない、いいかえれば民主的といえないと認知する学生は80%以上に達する。しかし、社会体制の各次元に対する多くの学生の否定的認知にもかかわらず、社会体制全体に対しては、やや穏やかな調子での不満・批判的な認知が大勢を示している。

また、政党支持について非常にきわだった特色がみられるが、それは50%の「支持政党なし」の学生がいるとともに、12.5%のD・Kグループがみられるという点である。「政治連合支持」についてもこの特質は基本的に変化しない。これらの「政党支持なし」層について、すでにのべた生活意識の諸要素を分析しても、これといった特性は何も見出すことはできなかった。いいかえれば、学生全般に分布する比率と同じような比率で各々のタイプの分布がみられるにすぎなかった。この点からみて「政党支持なし」層は、いわば学生全般を代表するかのような存在のように思える。こうして、学生たちの社会環境認知の特性は次のようにまとめることができるのではないか。すなわち、彼らは社会体制の様々な次元について否定的な見方をしている。特に政治に対する学生たちのイライラはそうとう

なものだといってよい。にもかかわらず、学生たちは特定の政党のリーダーシップのもとで特定の政治路線を選択しようとはしていない。先にみた自治会や自主的なコミュニケーション活動への態度といい、ここでみた政治的態度といい、いわゆる政治的無気力、政治的有効性感覚の喪失といわれるような事態が広く存在しているとも解釈され、また、彼らのイライラは合理的に方向づけられていないまま深まっているといつてよいだろう。

図一12 体制認識・政党支持の内的構造



表一7

あなたは現在の日本の社会体制を次の点で肯定、満足しているかどうか、お聞かせ下さい。該当する欄に○をつけて下さい。

(数字は%)

		1 非常 に満 足し、 肯定 し てい る。	2 大 体肯 定し てい る。 ま あ満 足す べき もの だ と考 えて い る。	3 肯 定も 否定 もし てい な ど ち ら と も い え な い。	4 批 判 的 に 考 え て い る。 や や 不 満 で あ り、 や や	5 考 え て い る。 不 満 で あ り、 批 判 的 に	6 わ か ら な い。
質問 1	将来に対する不安を抱く必要がなく、生活が安定している。	1.3	21.7	29.5	33.3	12.2	2.1
質問 2	人々の生活のあいだにそれほどの差がなく、ほぼ平準化している。	1.3	14.0	24.1	32.0	27.5	1.1
質問 3	生活が楽になり、豊かになっていく。	2.1	18.2	32.4	30.1	14.6	2.6
質問 4	戦争のおそれや、外国との紛争のおそれがなく平利に暮らせる。	5.4	15.9	20.4	31.6	24.3	2.4
質問 5	犯罪や退廃がなく社会秩序が維持されている。	4.1	16.3	18.7	35.5	24.3	1.1
質問 6	誰もが努力しだいで目的を達成できる社会である。	4.1	19.6	21.1	31.6	21.7	1.9
質問 7	国家や社会が人々の生活を手厚く保障しようとしている。	1.5	9.4	24.5	37.7	24.5	2.4
質問 8	人々の利害や意見がよく政治に反映され、公正な政治が行われている。	0.6	1.7	13.6	32.7	50.1	1.3
質問 9	全体として、日本の現在の社会体制は？	1.1	19.0	26.9	36.8	13.7	2.5

表一 8

あなたの政党支持と、これからの政治路線選択をおきかせ下さい。

(イ) 次の政党のうち、どれを支持しますか。支持する政党に○をつけて下さい。

政 党	(人)	(%)
1. 自由民主党	84	15.7
2. 日本社会党	41	7.6
3. 公 明 党	10	1.9
4. 民主社会党	8	1.5
5. 日本共産党	24	4.5
6. 新自由クラブ	11	2.0
7. 社会民主連合	9	1.7
8. そ の 他	4	0.7
9. 支持政党なし	267	50.0
10. わからない	67	12.5
回 答 な し	10	1.9
計	535	100.0

(ロ) 次のような連合があるとしたら、あなたはどれを選択しますか。

	(人)	(%)
1. 自民・民社の連合	42	7.9
2. 自民・民社・公明の連合	19	3.6
3. 自民・民社・公明社会の連合	39	7.3
4. 民社・公明の連合	3	0.6
5. 社会・民社の連合	10	1.9
6. 社会・公明の連合	6	1.1
7. 社会・民社・公明の連合	19	3.5
8. 社会・民社・公明共産の連合	19	3.5
9. 社会・共産の連合	38	7.1
10. 支持する連合なし	188	35.1
11. わからない	144	26.9
回 答 な し	8	1.5
計	535	100.0

以上のべたところを小括しておこう。

①学生たちは学生生活の全体についても、大学の全体についても不満が高い。

②学生生活をとりまく社会環境について、学生たちは否定的に考えており、この否定的認知は様々なレベルに広がり、特に政治についてはきわめてイライラした状態となっている。

③学生は大学を余暇的、実利的なものを追求する場と考えている。

④生活の中心的価値は仕事のなものとしての学習よりも、余暇的のものと考えており、

何か熱中できる事があれば学業を犠牲にしても惜しくはないとしたり、あるいは学業のために何かを犠牲にするのは馬鹿げた事で「そこそこに」バランスをもって楽しむのがよいとする考え方が支配的である。

⑤また、その生きがいは稀薄なものになっているとってよい。

⑥学業については、実利的、手段的に必要なものと考え、高い達成目標をかかっているが、成果は不十分だとしている。しかし、そのような成績不振は大した問題ではなく、生きがいは稀薄であっても「まあ充実している」とする学生も多い。

⑦自治的活動、政治選択などは、無気力で政治的有効性感覚を失っている。

このような生活意識をどう評価するかはここでは差し控えて「事実」の記述にとどめておく。例えば、学習よりも余暇的なものに中心価値をおいているという事は気になる事だが、速断はできないし、また学生として「社会的期待」に反するものなどとは決して速断できない。また、なぜこのような生活意識が形成されているかなどもここではのべる事はできない。

しかし、ここまでの生活意識諸要素の連関の他に、私たちは階層意識について調べてみた。学生の生活体系は、実は階層目標を達成する生活過程だという文脈に貫かれて、生活意識の具体的な構造が成立しているのではないかと推測されるのである。そういう意味で、ここでの生活意識の分析は他の要因と分析的に切り離し、あたかも一つの独立した連関をもった総体であるかのようにのべてきたのであるが、いわばそれは取扱ったかぎりの生活意識要素間の構造がどのようなものかをのべたにすぎない。上記の生活意識要素の連関としてのみ、「青年の生き方」をとらえ、成人のそれと比較することで青年の生き方の特色を理解したとするのはまったく不十分であるということができよう。しかし、これらについてはすべて別稿に譲らざるをえない。

(註1) 吉田昇, 門脇厚司, 児島和人編「現代青年の意識と行動」NHKブックス

(註2) 菊地章夫, 斉藤耕二編「社会化の理論」有斐閣

(註3) 客観的側面についての記述は一切, 別稿に譲ることとした。

(註4) 拙稿「生活の概念について」岡山大学教養部紀要 1978

(註5) 学校生活満足度についての最近の調査によると, 大学生は満足27.1%, まあ満足47.5%, やや不満17.5%, 不満6.8%となっており, これらと比較するとかなり満足度は低くなっている。総理府「現代の青少年——青少年の連帯感などに関する調査——」昭和56年64頁。

大学に対する不満の内容は, 全国調査では大学生の場合, 次のようになっている。総理府前掲書66頁。

講義	先生	施設	クラブ	友人	その他
60.5	20.9	30.2	9.3	4.7	16.3

この点では, 私共の調査と多少ズレがあるように思える。

(註6) 一般に青年たちは, どのような層をとってみても, スポーツ・趣味と友人・仲間といるときに生きがいを感じている者が多い。大学生についていえば「スポーツ・趣味に生きがい」は64.4%, 「友人・仲間」に生きがいは59.9%となっている。これに対して, 大学で勉強に生きがいをもつものは18.8%となっている。われわれの調査では単数回答なので複数回答のこの調査と直接比較することはできないが, 大よその傾向は一致するとみてよいだろう。総理府「青少年の連帯感などに関する調査」昭和56年142頁。

[追記 本調査を行なうにあたり, 郵送, 集計, 消書など一切の作業について, 南佐奈江さん(法文学部Ⅱ部55年卒)にお世話になりました。この機会をおかりして感謝の意を表します。]